

MATSUMOTO ASAOKO

できなくなっても、できる方法を挑戦し続けてきた
亜砂子さんの素敵なライフスタイル。



亜砂子さんとの歩み

亜砂子さんとの間わりは、10年来の知り合いがASCのメンバーだったことがきっかけで始まりました。その後、ASCでのサポートが続き、現在も関係が続いています。

これまで文字盤やタイプライター、ワープロ、パソコンなど、様々なツールを使ってきた亜砂子さんですが、今は自作の透明文字盤やiPadの読み上げアプリを活用し、周囲とやりとりをしています。新しいツールを取り入れながら、自分に合う方法を模索している姿がすごく素敵で、印象的です。その前向きな姿勢に、学ばせてもらうことが多いです。

PROFILE

松本 亜砂子

中学1年生の時に交通事故で全身運動や表情、声を失いました。しかし、本人は決してどんなことも諦めず、時代ごとに様々な機器に挑戦しては使いこなし、今ではヘルパーさんのサポートを受けながら都内で一人暮らしをしています。外出も積極的にを行い、日々新たなチャレンジをしています。



ASCからのコメント

全て誰かに手伝ってもらえば楽なはずですが、それでは亜砂子さんではなくなってしまう。亜砂子さんに会うたびに、そっと手助けするだけ、それが周囲の人ができるべきことだと実感します。デジタルとアナログを併用し、あの手この手でコミュニケーションを取り続ける努力は本当に素晴らしいです。私たちも亜砂子さんのようなかっこいい人になりたいものです。

「自分で考えて決めていく」それが
亜砂子さんのスタンダード。

亜砂子さんのすごいエピソードは挙げたらキリがないです。若い頃は周囲のサポートも受けながら、モンゴルへ飛んで気球に乗ったことも。そのアクティビティには脱帽です。

毎日の暮らしで亜砂子さんらしさを感じるのは、なにより一人暮らしをしていること。しかも24時間ヘルパーさんがつきっきりということではなく、一人で過ごす時間もある。自分だけの時間も大事にしているのが、亜砂子さんのスタイルなんです。iPadを使うことで、時間が来たら音楽をかける、掃除機をかける、電気・テレビ・エアコンの操作も自分で行っています。「冷蔵庫に何が残っているから夕食はそれで作ってください」と、LINEで自分でヘルパーさんに依頼していたりもする。iPadが使えない時(お風呂とか、操作手段がない時とか)は、自分で開発した透明文字盤「フリッキー」を使っている。これってまさに、アクセシビリティです。

POINT

亜砂子さん考案のフリック入力の原理を使った透明文字盤「フリッキー」。50音の文字列を4つのエリアに分け、行を十字に配置することで、文字をシンプルに絞り込めるような仕組み。的確に動かせる部位が1箇所あれば、相手が聞いていく形でエリア、十字形、目的文字を伝えることができます。



まだまだ挑戦はつづく。



iPadの操作も新たな方法に挑戦している亜砂子さん。一般的に五十音が書かれた文字盤から一文字ずつでも選んで伝えられたらそれでいい、と済ませてしまう周囲の人は多いです。でも、文字盤で用事を伝えて何かをしてもらうためだけに生きているのではないですから、自分で考えて、いろんなことをしてみようと思って暮らしていくためには、iPadとの出会いは大きかったと思います。最初はわずかに動く首を使ってヘッドスティックで操作していたのですが、首の疲れが年齢とともに厳しくなってきました。その代用手段として現在は視線入力装置を導入・練習しているところです。

「この道40年のプロですから」と亜砂子さんはいいます。不便なことがあれば工夫して解決するという考え方がまさにプロです。今回の撮影時にも「フリッキー」を改良したいところがあると教えてくれました。「それはどんな方法ですか?」と聞くと、「ひみつ」と言ってニコッとする亜砂子さん。その笑みにまた新しい挑戦が隠れていると思うこちらもワクワクします。今度またこっそり聞きに行かない。

